バオバブ（アダンソニア）の育て方

Adansonia

アオイ科 / Malvaceae

> 「生命の樹」とも呼ばれる巨木バオバブ。ぽってりと膨らむ幹に水をたくわえる生命力と、8種それぞれ異なる姿が魅力の塊根植物です。実生から育てれば、あの神話的な巨木の物語を手のひらサイズから体験できます。

基本データ

成長期	夏型
耐寒温度	**冬は最低10℃程度が目安（霜は大敵・要確認）**
日照	**日当たりを好む（強光要求。室内は高照度LED補光を）**
播種適期	**4〜8月**
発芽日数	**前処理法により数日〜4週間程度**
主原産地	**マダガスカル固有種が中心（一部はアフリカ大陸・オーストラリア北西部にも分布）**
難易度	

概要・魅力

アダンソニア属は、ぽってりと丸みを帯びた幹に大量の水をたくわえる、通称「バオバブ」として知られる巨木の仲間です。分類上は**アオイ科（Malvaceae）ボンバックス亜科**に属し、世界にわずか8種しか存在しません。マダガスカルに6種、アフリカ大陸のサバンナに1種（**A. digitata**）、そしてオーストラリア北西部に1種（**A. gregorii**）が分布し、地球上でこの3つの地域だけに自生する非常に希少な植物群です。

2024年に発表された系統地理学の研究では、現存する8種すべての祖先がマダガスカル島内で放散・交雑した後、2つの系統がそれぞれアフリカとオーストラリアへ長い年月をかけて渡っていったことが明らかになっています。「生命の樹」とも呼ばれるバオバブの壮大な旅の物語は、実生から育てる楽しみに深みを与えてくれるはずです。

最大の魅力は、幹の内部にある柔らかい組織にたくわえられる水分。乾季に新しい葉を展開するためのエネルギー源として使われるこの貯水機能こそが、あのユニークな「ボトル型」の幹をつくり出しています。実生の小苗のうちから、地際にぽっこりとふくらむ塊根の姿が見え始めるのも、コーデックス（塊根植物）ファンにとってたまらないポイントです。**SEEDSTOCK**では、そんなバオバブの実生栽培に挑戦できる種子を取り扱っています。

- **A. digitata**：アフリカ大陸原産で最も丈夫とされ、白い花を下向きに咲かせる
- **A. rubrostipa**：マダガスカル南西部原産。8種の中でも小型でボトル状に膨らみやすく、コーデックス趣味で人気
- **A. grandidieri**：直立した円柱状の幹が特徴で、マダガスカルの「バオバブ並木道」で知られる
- **A. za**：マダガスカル産6種の中で最も分布域が広く、比較的育てやすい

置き場所

バオバブは強い光を好む植物です。生育期には**屋外の日当たりの良い場所**や、直射日光がよく入る窓辺で管理しましょう。光が不足すると茎がひょろひょろと間延びする徒長を起こしやすいため、室内で育てる場合は高照度のLEDライトなどで光量を補うのがおすすめです。**SEEDSTOCK**の種子から育てた実生苗も、まずは十分な光を確保できる置き場所を用意してあげることが、丈夫な株に育てる第一歩になります。

生育期（春〜秋）

気温が上がる春から秋にかけては、現地の「雨季」を再現するイメージで、しっかりと日に当てて活発に成長させます。屋外で管理する場合、真夏の急な直射でいきなり強光にさらすのではなく、少しずつ日光に慣らしていくと安心です。

休眠期（冬）

気温が下がり葉を落とす秋以降は、現地の「乾季」にあたる休眠期に入ります。凍結しない室内の明るい場所に移し、**最低気温10℃程度**を目安に管理してください（品種や株の状態による差があり、正確な下限値は環境によって変わります）。0℃前後の霜に当たると致命的なダメージを受けるため、特に注意が必要です。

水やり

バオバブ栽培でもっとも注意したいのが、**休眠期の水のやりすぎによる根腐れ**です。乾季と雨季のメリハリをはっきりつけることが、健康な株を育てる最大のコツになります。

生育期（春〜秋）の水やり

土の表面が乾いたら、鉢底から水が流れ出るまでたっぷりと与えます。その後は次に土が乾くまでしっかり待ち、乾湿のメリハリをつけましょう。秋に向けて気温が下がり始めたら、少しずつ水やりの回数や量を減らしていきます。

休眠期（冬）の水やり

葉を落として休眠に入ったら、**断水するか、月1回ごく少量に留める**のが基本です。休眠中の株はほとんど水を必要とせず、この時期に水分過多になると根が傷み、そのまま枯死してしまうケースが目立ちます。「バオバブは乾季を耐え抜く木」であることを意識し、少し心配になるくらい水を控えめにするのがちょうどよい管理です。

> 休眠期の水やりでもっとも多い失敗は「まだ大丈夫だろう」という油断です。葉が落ちて動きが止まったら、思い切って断水に切り替えましょう。

用土・植替え

バオバブには**水はけのよい用土**が欠かせません。過湿になりやすい粘土質の土壌では発芽・生育ともに成績が大きく落ちることが研究でも示されており、排水性・通気性を重視した配合が基本方針になります。

用土の配合例

- **シンプルな配合**：サボテン・多肉植物用の培養土50% ＋ 川砂25% ＋ パーライトまたは軽石25%
- **もう一つの配合例**：腐葉土などの腐植質の土と赤玉土を等量混合し、川砂を加えて排水性を高める

成長は総じてゆっくりで、鉢植えの実生苗であれば年に数cm程度の伸びが目安です。植え替えの頻度は**2〜3年に1回り大きな鉢へ**で十分で、適期は生育が旺盛になる5〜8月頃です。

塊根を見せる植え付け

実生の初期は、地上部よりも先に地中の直根がぐんぐん太る性質があります。この直根の肥大が、後の塊根（コーデックス）形成の土台になると考えられています。実生後2年ほど経ち株元のふくらみがはっきりしてきたら、植え替えのタイミングで塊根部分を土の上に少し露出させるように植え付けると、バオバブらしいボトル型の姿を早くから楽しめます。

発芽のさせ方

バオバブの種子は非常に硬い種皮に包まれており、そのままでは水や酸素を通しにくく休眠状態が続いてしまいます。**SEEDSTOCK**で扱う種子も同様の硬実種子のため、以下の前処理をしっかり行ってから播種することが発芽成功の一番のポイントです。

播種の適期

気温が安定して20℃を超える**4〜8月頃**が播種の適期です。秋以降にまくと、冬を迎えるまでに苗が十分に育たず、そのまま枯れてしまうリスクが高まるため注意しましょう。

発芽までの手順

1. **種子の前処理（傷付け、または熱湯浸漬）**：種子のへこみと反対側（背側）を、爪切りやヤスリで胚が透けて見える直前まで薄く削ります。傷を付けたら水に24時間ほど浸けて吸水させましょう。ヤスリがけが不安な場合は、75〜80℃程度の湯に浸し、自然に冷めるまで（半日〜24時間ほど）置く熱湯処理でも構いません。どちらも家庭で扱いやすく、高い発芽率が報告されている前処理です。
2. **播種**：赤玉土小粒やバーミキュライトなど、排水性のよい清潔な用土に、種子の厚みの2〜3倍程度の深さで覆土します。
3. **温度・湿度管理**：25〜30℃程度を保てる、直射日光の当たらない明るい場所に置きます。用土の表面が乾かないよう、霧吹きなどでこまめに湿らせてください。
4. **発芽**：前処理の方法や個体差にもよりますが、早ければ1週間前後、通常は2〜4週間ほどで発芽します。低温だと発芽前に種子が腐ってしまうことがあるため、温度管理を切らさないようにしましょう。
5. **発芽後の管理**：発根・発芽を確認したら、徐々に光に慣らしながらサボテン・多肉植物用の用土に植え替えます。本葉が展開してきたら、生育期の水やりサイクルに移行してたっぷりと育てましょう。

病害虫・トラブル

バオバブの成木は比較的病害虫に強い植物ですが、実生の小苗のうちや管理方法によってはいくつかのトラブルが起こります。早期発見・早期対処を心がけましょう。

根腐れ

バオバブ栽培で最大のリスクが根腐れです。とくに休眠期の水のやりすぎ・排水不良が主な原因で、気づいたときには手遅れというケースも少なくありません。「休眠期はほぼ断水」を徹底することが、なによりの予防策です。

害虫

- **カイガラムシ**：茎や葉の付け根に白い綿状の姿で発生しやすく、実生の小苗ではとくに注意が必要です。見つけたら歯ブラシなどでこすり落とすか、殺虫剤を使用します。
- **ハダニ**：乾燥した環境で発生しやすく、葉の裏に寄生して汁を吸います。こまめな葉水や霧吹きが予防に役立ちます。
- **コナジラミ**：新芽や葉裏に群生し、生育を弱らせます。風通しを良くし、早期に見つけて駆除しましょう。

徒長

光量不足のまま管理すると、茎がひょろひょろと間延びする徒長を起こしやすくなります。バオバブは強い光を好む植物なので、屋外の日なたか、高照度のLED補光でしっかり光を確保してあげましょう。

寒さによるダメージ

低温期の水やりは根腐れに直結しやすく、とくに霜に当たると致命的です。気温が下がる季節は水やりを控えめにしながら、暖かい室内でしっかり保温してあげてください。

🖊️ 栽培メモ

バオバブ（アダンソニア）の種子を探す
QRを読み取る／seedstock.jp